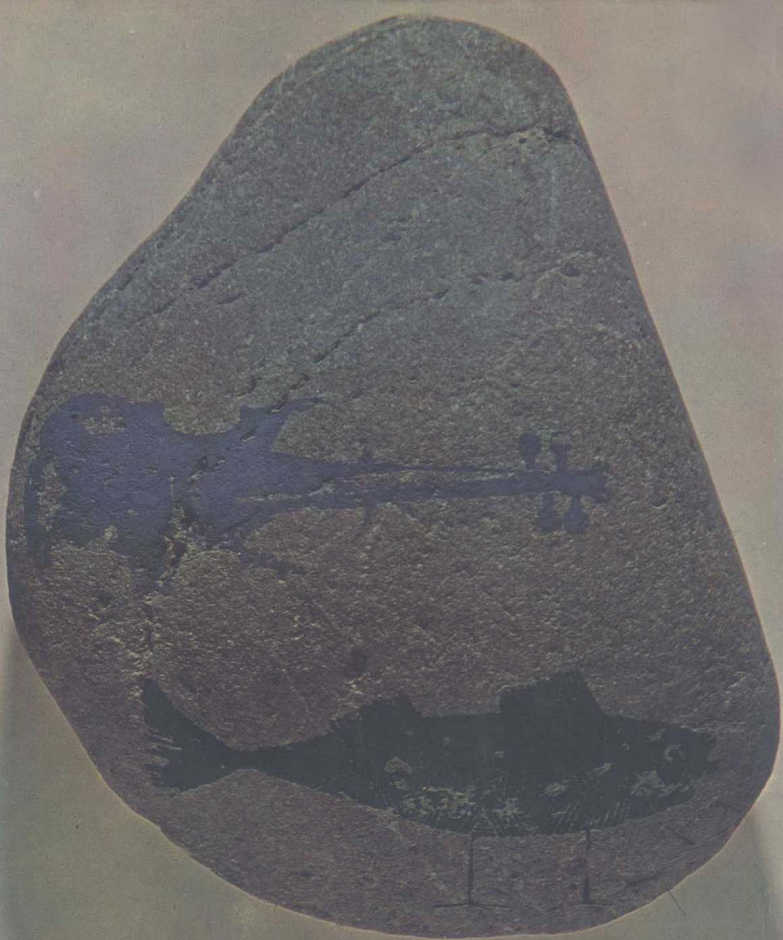




日本の詩歌

山本太郎 編著

著者略歴

山 本 太 郎 (やまもと たろう)

1925年 東京に生る

1950年 東京大学独文科卒業

＜現 在＞ 「歷程」同人，現代詩人会会員，現代詩の会会員，日本ペンクラブ会員

＜著 書＞ 詩集「歩行者の祈りの唄」「山本太郎詩集」「ゴリラ」他

＜現住所＞ 武蔵野市境1の17 興栄マンション むさしの503号

＜お願い＞

☆ご愛読ありがとうございました。小社ではみなさまの声を参考に、より良い本を作るよう努力しておりますので、本書の読後感をお聞かせくだされば幸いです。また内容や造本についても、お気づきの点がありましたらご指摘ください。

☆現代教養文庫の定価は、すべてカバーに明記してあります。

☆万一、落丁乱丁の場合は、直接小社にお送りくだされば早速お取替します。

☆本書巻末に記載の広告中、定価に変更がある場合もありますので、あらかじめご了承ください。

現代教養文庫 381 日本 の 詩 歌 © 1962

昭和 37 年 7 月 10 日 初版第1刷発行

昭和 53 年 3 月 30 日 初版第14刷発行

編 著 者 山 本 太 郎

発 行 者 小 森 田 一 記

発行所 株式会社 社会思想社

(113) 東京都文京区本郷1-25-21

電話代表 (03) 813-8101

振 替 東 京 6-71812

0192-10381-3033

印刷・製本 城北センター

也教養文庫

381

日 本 の 詩 歌

目次

上代の歌	(八)
飛鳥・奈良時代の歌	(三九)
平安時代の歌	(三八)
鎌倉・室町時代の歌	(一八六)
江戸時代の俳諧および和歌	(二二七)
現代の詩歌	(二五七)
詩	(二六一)
短歌	(三八六)
俳句	(四一九)

まえがき

歴史を遠い過去の物語としてではなく、生きてなお僕達に「つづく」ものとして感じることのできる人は、幸いである。そして歴史の体温と、じかに接触したいと思うなら、祖先の肉声である、多くのすぐれた詩歌に僕達は、耳をかたむけるがいい。

僕はけれど、国文学者ではない。時間の長いへだたりからくる古典の難解さに、何遍でもつまづきながら、信ずべき専門家の導きに服して、広大な日本語の詩歌の園を遊泳する。そして、古代人がすぐ傍に問題として、いまでも生きていることに新鮮な驚きをもつのだ。僕の人生の時間軸は、僕の肉のほろびさる数十年の矮少を超えて育ち、空間軸は、例えば「旅人」の人生流転の実にふれ、自分の貧弱な経験世界を超然して拡がる。

詩歌は、時間に従属しない。人間の生き方の根本に発生して、常にフレッシュである。

僕達は、凡百の流行を追うより、一つのすぐれた古典にふれ得る、貴重な選択権をもっている。風俗、社会、人生観など、あらゆる時の抵抗をこえ、かりに千年閱せば、その作品にこもる人間の声は、千年の重量をもっているのだ。僕達は国文学的常識に従いながらも、それぞれ自己に照応しあう多くの「遠い言葉」を、もっと自在に鑑賞する自由も持っているはずだ。

素朴に哀しみ、素直に愛を語る——そういう「からくり」のない人生が、僕達を告発している。古代人の問答歌、万葉の東歌のゆたかな「ひなぶり」、古今の風雅によせて物語る人間の存在論

的危機、室町の無常、芭蕉の遍歴的人生感と蕪村の美学。「美」が人間を善へ導くと考えたプロティノス的思想。詩歌に定着された人間の声が、僕達に「幸福」とは一体何であるかということをも、沢山の熱い舌で語ってくれる。

「人間の厚み」を計ろう——そんな尊大な心で僕は古典に接近し、いまはただ、謙虚に、現代に生きる自分のノドで唄おうと考えるものだ。浅学につきる僕の、この粗雑な編集が、いささかでも、歴史のなかに潜在する多くの声を、キャッチできれば望外のよろこびである。

さきに編集した『愛の詩歌集』とはほぼ同じ年代を対象としたため、重複をまぬがれぬ点も多いけれど、今回はできる限り、周知の「名作」を収めようところがけた。ただし、現代篇においては、頁数の関係で、その作家の代表作を収録する事が不可能の場合も多くあった。短歌、俳句など、断片的な作品抄にとどまった諸家への非礼も、おわびせねばならぬと思う。

しかし、能う限り多くの作品をよみ、かなりの年月を経て、自分の詩人としてみずから好み敬愛するところを素直に編集しようと意図したことを附言したい。

出典表記の一例として「万・一」は「万葉集一巻」の意。

前詞の長文に亘るものは、編者がこれを口語に改めて新訳しへ……で示した。

脚注は新仮名遣いに統一。

人名の振仮名は、明治以降は新仮名遣いに統一、但し、作品は原文のまま。

上
代
の
歌

上代の歌

—記紀の歌謡—

古事記（和銅五年）日本書紀（養老四年）続日本書紀（延暦一〇年）風土記（和銅六年に勅令により諸国の国司により選進されたが詳細は不明。現在、常陸・播磨・肥前・丹後・伊勢などの風土記が残っている）等におさめられた宮廷歌謡・物語歌謡・民謡・童謡などを総称して「記紀の歌謡」といつている。

日本古代の、我々の祖先の生活感情を伝えるこれらの歌は、ほとんどが烈しい男女の愛情表現であり、その率直な人間性と、ユーモラスな内容はむしろ時代をこえて新鮮である。

誤解をおそれずに言えば、古今集や新古今集の、いわゆる職業化した歌人達の定型詩よりはるかに人間の生の声がきかれる。万葉集の詩歌のごとく個人の意識は未だとはしいが、集団的な労働や五穀の豊穡を祈る祝祭の合唱からは、素朴な生活人の息吹きがきこえてくる。

古代歌謡のリズムは概ね短歌（五五七七）旋頭歌（五七七、五七七）片歌（五七七）長歌（五五七七：五七又は五七七）仏足石歌体（五五七七七七）であり、

更にまたそのヴァリエーション、応用である。

そして一般にその基本的な詩形は「八雲立つ」の歌の如く前後二段の対立様式で、即ち「出雲八重垣」までの前句が句切れとなり主題を示し、後半がその説明を了るといった形をもつ。

歌の形ばかりでなく、その内容に問答の性質があるという事は、古代の歌謡の叙事性を物語るもので、そこから次第に感性が洗練され、主情のみがのこる一人称の発想、即ち短歌的抒情の世界に移行してゆくのだ。尚、記紀歌謡中の作者名は、何れも語り伝えによるものであることを、初に心得ておいてほしい。神楽にその倣がしのばれるように、古代、夫々の氏族は、その祖先の威業を讃える為、其の業績をあらわす簡単な筋書を持った舞踊劇を祭の時に演じた。其の際主人公の歌った歌が、神々の又は祖先の英雄の作った歌と考えられるようになったものであろう。

また、さきにまとめた『愛の詩歌集』との重複をさけたため、例えば、大國主命と須勢理比売との愛の歌などの多くすぐれた作品を割愛した。あわせみていただければ幸である。

上代の歌

須佐之男命すさのをのみこと

八雲立つ

出雲八重垣いづもやへがき

妻ごみに

八重垣作る

その八重垣を

(古事記・日本書紀)

雲が盛に湧き立つて来た、この出雲の地に妻をこもらせようと。

須佐之男命が稲田姫を大蛇から救つて、結婚した時の喜びの歌であるという。此のリズムが、我が国の歌の基調となっている。

高比売命 たかひめのみこと

天あめなるや

おとななばた
弟棚機の

項^イがせる

玉たまの御統みすまろ

御統に

八玉はや

谷二渡らす

阿治志貴

高日子根の神ぞ

（古事記）

天若日子は、出雲国状偵察の為、
あのかほひのかみ
天菩比神に次いで高天原から派遣されたが、菩比神と同じく、大
国主命に心服して高天原に帰らな
かった。その為神々の怒の矢に当
つて死ぬ。その葬式に参列した阿
治志貴高日子根の神の顔が、天若
日子に似ていたので、高天原から
駆けつけた天若日子の家族達に間
違えられ、高日子根は死人と間違
えられたのを怒って席を立つ。そ
の時、妹の高比売命が、彼の名を
人々に告げる為に歌ったというの

神武天皇

宇陀の 高城に 鳴鶴張る

我が待つや 鶴は障らず

いすくはし 鯨障る

前妻が 看乞はさば

立槻稜の 実の無けくを 扱きしひゑね

後妻が 看乞はさば

拾 実の多けくを 許多ひゑね

ええしやこしや こはいのごふぞ

ああしやこしや こは嘲ふぞ

である。

歌の大意は——天の機織女が首にかけていたような美しい穴玉のよ
うに、二谷二丘を輝きてらすば
らしい高日子根の神だ。

高日子根神は雷神で、この歌はも
ともと古代人が電光を讃美した民
謡であつたと思われる。

記紀歌謡中、好きな歌の一つ。

大和平定の折、天皇の命を救つた
弟宇迦斯の主催する戦勝の祝宴で
歌われた歌。兵士達の合唱であつ
たろう。

待っていた鴨がかからないでとん
でもなくでかい鯨がひっつかつ
た。想像をたくましくすれば「美
しいすらりとした今の若女房はや
つて来ないで、鯨みたいに肥つた
先妻が来ちまつた」というユーモ

上代の歌

11

アかも知れない。そしてお前には「実の無けくを」若い女房には「実の多けくを」やれ、というのであるから痛快だ。さいごの囃詞も健康な哄笑をきく思いがする。

神武天皇が土雲八十建を、謀を以て撃とうとする時、部下に合図する為に歌った歌・頭椎い——刀の柄頭が椎の形をしたもの。石椎い——石作りの頭椎の刀。

同じく、登美毘古を撃つ時の歌。

臭葦一本——くさい一株のニラ。

根芽つなぎて——つなぎ捨ててうに敵を敵珠つなぎに滅ぼそう。

口ひびく——口がびりびりして

(その痛手を忘れられない、仇はうつぞ)。

同じく、兄師木、弟師木と戦って疲れた時の歌。

忍坂の 大室屋に 人多に 来入り居り 人多に 入り居りとも
みつみつし 久米の子が 頭椎い 石椎いもち 撃ちてし止まむ
みつみつし 久米の子らが 頭椎い 石椎いもち 今撃たば良らし

みつみつし 久米の子らが 栗生には 臭葦一本
其ねが本 其根芽つなぎて 撃ちてし止まむ

みつみつし 久米の子らが 垣下に 植ゑし 椒
口ひびく 我は忘れじ 撃ちてし止まむ

神風の 伊勢の海の 大石に 這ひ廻ろふ
細螺の い這ひ廻り 撃ちてし止まむ

楯並めて 伊那佐の山の 木の間よも い行き目守らひ

戦へば 我はや飢ぬ 島つ鳥 鶺鴒が伴 今助けに来ね

〔古事記〕

伊須氣余理比売

〈大久米命が神武天皇の心を比売に

つけたとき、比売が歌ったうた〉

胡燕子鵲 千鳥ま囀 何ど裂ける利目

〈大久米命が答へて歌ったうた〉

娘に 直に逢はむと 我が裂ける利目

〔古事記〕

狭井河よ 雲立ち渡り 畝火山 木の葉さやぎぬ 風吹かむとす

畝火山 昼は雲とゐ 夕されば 風吹かむとぞ 木の葉さやげる

神武天皇の重臣であつた大久米命が、天皇の恋心をかわつて伝えようとしたとき比売が「貴方は何故、雨燕や頬白のようにそんな大きな目をしてごらんになるのです」と歌つた。大久米命は仲々の粹人で「お嬢さん、私は御主人の命令で美しい貴女にあいたくてこんな大きな眼をしているのです」と答えたという。古代人は、求婚に際してこうした機智にとんだナソナソ問答のようなことを楽しみ、難題を上手にといた男に身をゆるす風習があつたのだらう。比売は天皇の後になつた。

神武天皇崩御後、後の伊須氣余理比売は、異腹の皇子当芸志美美命に結婚を求められたがその時、実の皇子達が彼によつて殺害されようとするのを知り、歌を以て急を

(古事記)

知らせたと伝えられる。風吹かむとす——いまに大事件がやつてきますよ、の意。

幣羅坂の少女

御真木入日子はや 御真木入日子はや
己が命を 盗み死せむと
後つ戸よ い行き違ひ 前つ戸よ い行き違ひ
窺はく 知らにと 御真木入日子はや

(古事記)

崇神天皇(御真木入日子)の御代、伯父の大毘古の命が四道將軍の一人として北陸地方に赴く時、道に少女が現れて、天皇に謀反する者があると告げる歌を歌い、かき消す様に見えなくなったという。その歌。ともに物語歌の一種である。

倭建命

やつめさす 出雲建が 佩ける太刀
黒葛多巻き さ身なしにあはれ

(古事記)

倭建命が出雲建を謀殺した時の歌。即ち、命は木刀を作つて密かに相手の刀と取替え、試合に事よせ相手を斬つた。

新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる
日日並べて 夜には九夜 日には十日を

(命)
(火焼の老人)

(古事記・日本書紀)

東国から甲斐の国に入った時の命と老人の問答形式の歌。

尾張に 直に向かへる 尾津の埦なる 一つ松 あせを

往きに一本松の下で食事した時掛

一つ松 人にありせば 太刀佩けましを 衣着せましを 一つ松
あせを
(古事記・日本書記)

大和は 国の真秀ろば 豊なづく 青垣
山籠れる 大和しうるはし

命の 全けむ人は 豊薦 平群の山の
熊白橋が葉を 馨華に挿せ その子

はしけやし 我家の方よ 雲居立ち来も

嬢子の 床の辺に
我が置きし つるきの太刀 その太刀はや

大御葬の歌

なつきの 田の稻幹に 稻幹に 這ひ廻ろふ 薜葛

(古事記)

け忘れた太刀が帰りに見るとその
まま残っている。あたかも一本松
が命を待っていたようであった。

能煩野滞在の時、故郷の大和を偲
んで歌ったという。命は此の地で
病死する。

命の全けむ——若い健康な人。豊
薦——平群の枕詞。歌垣の民謡で
若者に青春を無為にすごすなとさ
とす老人歌。

五七七の形をとった片歌である。
はしけやし——我家をほめた修飾
語。

尾張の美夜受姫のところに置いて
きた草薙の剣を思つてうたう。

白鳥となつて墓から飛び立つ命を
したつて、妃や皇子等が追いつつ
歌つたと伝えられ、代々の天皇の

浅小竹原 腰泥む 空は行かず 足よ行くな

海が行けば 腰泥む 大河原の 殖草 海がはいさよふ

浜つ千鳥 浜よは行かず 磯伝ふ

弟橘比売命

おとたちばなひめのみこと

さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の
火中に立ちて 問ひし君はも

(古事記)

葬送の時歌われていた。
足で歩くまだるっこさ、海草には
ばまれて白鳥を追ってゆけないく
やしさを歌う。

(古事記)

伝説では弟橘比売が荒海に身を投
じたときよんだ歌になっている。
さねさし——相模の枕詞。「かつ
て相模の野中で賊の火攻めにあつ
たとき貴方はそんなときでも私の
身を気づかって下さった」という
倭建命への恋心を歌ったうたであ
るが、「問う」というのは普通は
「つまどい」つまり求婚の事であ
る。相模地方の民謡と考えれば、
野火をたく相模地方の早春の頃、
ロマンティックな雰囲気なかで
愛を語る若い男女の自然詠として
たのしめよう。